

ロック『統治論』初版について

浜 林 正 夫

ジョン・ロックの『統治論』の初版は、1689年8月22日に出版許可が与えられ、そのタイトル・ページには「1690」と書かれているけれども、実際には1689年12月には出版されていた。印刷部数は1千部と推定されている。

この初版に2つの種類のものがあるということを発見したのはピータ・ラスレットである (Peter Laslett, “The 1690 Edition of Locke’s *Two Treatises on Government: Two States*,” *Transactions of the Cambridge Bibliographical Society*, vol. I, part IV, 1952)。ラスレットはこれを1Xおよび1Rとよんでいるが、1Rはまったく完全であって書誌的に興味をひくような点は何もない。しかし1Xの方は235—7ページ (折標記号Q) のところで活字が大きくなり、第2部第3章の終わりの方の節番号§21がなく、1Rとくらべてみるとほぼ2ページ分の文章が脱落している、というのである。ラスレットが検討した16冊の初版のうち、7冊は1Xで9冊が1Rであったというから、推定1千部の初版のうち、1Xという欠陥本がかなり出廻ったものと思われる。

1Xで脱落しているのはつぎの文章である。第2部第3章§20は “But when the actual force is over, the State of War ceases between those that are in Society, and are equally on both sides

subjected to the fair determination of the Law ……”となっているのだが、1Xでは“subjected to the fair……”以下がなく、“on both sides subject to the judge”となって、そのあとすぐに§ 21の終わりの方の“And therefore, in such Controversies, where the question is put, who shall be Judge?”とつづくのである。だから§ 21の記号もなく、節番号も§ 20から§ 22へととんでしまうことになる。つまり、「裁判官の決定に服する人びとのあいだでは戦争状態は終わりをつげる」という文章から、「だれが裁判官であるのかという問題が生ずるときには」という文章へつづくことになるのだが、1Rの方ではこのあいだに、「しかし自然状態では裁判官はいないから戦争状態はつづき、地上には訴えるところはないから天に訴える以外に救いはない」というような内容の文章がはいっている。鶴飼信成訳の岩波文庫版でいうと25ページのうしろから2行目から27ページの10行目までが、この脱落している部分である。

II

どうしてこのようなことがおこったのだろうか。

まず1Xと1Rとのいずれが先に印刷されたのかという問題があるが、これについては1Xの方が先ということで研究者の見解は一致している。つまり、1Rが先で、あとから削除したのではなく、1Xが先で脱落部分はあとの追加だ、ということである。それでは1Xでどうして脱落が生じたのか。印刷の過程の単純なミスとも考えられるが、1Xでは“on both sides”のあとが“subject to the judge”という1Rにはない言葉がはいっており、単純に原稿をよみとばしたとは考えられないふしもある。そこでラスレットは1Xの校正刷りをみていたロックがここで文章を削除し、代わりに1Rにあるような文章を追加したのだ、と推定する。つまり、最初の原稿は1Xとも1Rともちがうものであったというのである。ではなぜこういういれかえがおこなわれたのか。それは最初の原稿が1688年以前に執筆されており、国王追放という新事態にふさわしくなかったからだ、というのがラスレットの結論である。

しかしこの推定はどうもあまり説得的ではない。脱落部分があわてて書き直した追加部分だとするなら、最初の原稿を削除したままで印刷が進行していたというのもおかしな話だし、「天にむかって訴える」ということは脱落部分にだけのべられているのではなく、1Xでもすぐつづいてでてくるのだから、新事態にあわせて書き直したというほど大きな意味をもっているようにも思えない。

ラスレットのこういう解釈については同じ雑誌の第2巻（1954年）で F. Bowers と J. Gerritsen が異論を提出しているが、ラスレットは1960年に『統治論』のクリティカル・エディションを出版したとき解説のなかの注でこの Gerritsen の解釈についてふれ、これはいままでの複雑な推定をいっさい不必要とする「みごとに簡潔で満足すべき説明だ」とのべているが、この Gerritsen の説というのは印刷の単純ミスという説であって、1Rにおける追加が最初の原稿の復元なのか、新しい書き直しなのかは明言されていないけれども、復元説に傾いているように思われる。ただそうすると、さきにのべたような、“on both sides”のあとの文章のちがいをどう説明するかという問題が残ることになるが、この問題にはふれられていない。Gerritsen はさらに、ロックは校正刷りをまったくみていなかったのではないか、という問題も提出している。校正刷ではなく、刷りあがったものがシートごとに著者のところへ届けられ、誤りがあれば正誤表をつけるのがこの当時のやり方のようなのだが、この本の印刷屋の Awnsham Churchill がなかなかシートを届けなかったらしく、クラークあての手紙でロックは苦情をいっており、再版のための校正のときにもロックは「どうもこの本は最悪のものになる運命にあるようです。それを避けるためにだれが努力してみても無駄でしょう」と1694年3月12日づけのクラークあての手紙でのべている (*The Correspondence of John Locke*, ed. by E. S. de Beer, Oxford, 1979, vol. V, p. 30)。

III

1Xと1Rとの差をめぐる議論は以上のような簡単なものでなく、活字の大きさや版面の大きさなどをめぐって複雑に展開されているのだが、1Xの実物をみてみないとどうも理解しにくい。ところがロックの

『統治論』の初版はたいへんな稀覯本で日本にはないと思われていた。この古典資料センターにも第2版しかなく、クレス＝ゴールドスミス文庫にも初版はない。ごく最近、慶応大学へ寄贈された高橋誠一郎氏の蔵書中に初版があるときいて、とくにお問い合わせしてさせていただいたが、これは残念ながら(?)1Rの方であった。

しかし『統治論』のいろいろな版のなかには1Xを底本としたものもあるから、どこが脱落しているか、ということだけなら容易にみることができる。たとえば1884年刊行のヘンリ・モーリ編の『統治論』は1Xそのままであって、§ 21のしるしはまったくない。もっとも1889年に別の書店から刊行したときには、編者モーリは1Rによることとしたらしく、脱落はなくなっている。もっとポピュラーなのはW.S. カーペンター編のエヴリマン版であって、これの古い版では脱落部分はそのままして§ 20は終わり、つぎの節(1Rでは§ 22)を§ 21と勝手に直し、以下§ 35(1Rの§ 36)まで節番号をひとつずつくりさげ、§ 35の途中で1Rにはない区切りをつくって§ 36として節番号を調整してしまった。ラスレットの研究がでてから、さすがにこの勝手な調整は改められたが、しかし脱落部分は復元せず、§ 20のあとに「この底本では第21節はない」という注をいただけである。これもじつは不正確で、第21節がまるまるないのでなく、§ 20の途中から§ 21の途中までがないのだが、エヴリマン版をみているだけではそのことは分らないし、底本の説明もないから、ラスレットの研究を知らないとこの注の意味は理解できない。J.W. ゴフが1948年に刊行したブラックウェル・ポリティカル・テキスト中の『統治論』では該当箇所には脚注があり、初版では脱落があって、“And, therefore, in such controversies……” のところから§ 21がはじまり、第2版で脱落がうめられた、とのべられているが、これも不正確で、1Xには§ 21のしるしはなく、脱落がうめられたのも第2版ではなく、もうひとつの初版なのである。

(一橋大学経済学部教授)